

2004年5月15日

事例報告 情報教育はコミュニケーション教育へメディア学習の現状報告

この二十一年間、学校では、な紙みがなされてきました。少子化、不登校児童・生徒の増加、学力低下などが問題となり、教育方法も含めて様々な校は社会の要請する人材を育



かりやと しげのり 宿 俊文 さん

大東文化大文学部助教授。小学校教諭を経て現職。専門は教育工学など。NPO「学習環境デザイン工房」主宰。

せな時代から「自分に納得すること」が求められる。基礎・基本だとされま

てのが役割ですが、学校の競争が将来、全く役に立たないと言われているのです。二〇五〇年には世界の人口

問題解決能力の習得重要

は九十億人になるといわれています。石油資源が減り、環境問題も深刻になり、私たちは二十世紀の工業社会のままではいられなくなりました。さらには「モノがあることが幸

取ることが求められています。ところが、学校はまだ社会の要求に合せていません。一九九九年のケルン・サミットでは、情報活用能力が読み書き計算と同じぐらいの学習

が自分の考えをまず伝えることが大切になってくるので、メディアを利用することで理解を促進する学習が始まり、教科学習も少しずつ変化

しています。国語は習ったことを覚えるのではなく、感じる心を持つこと、社会科は人を通して学ぶこと。そして「総合的な学習の時間」は自分で学習計画を立て、実践し、後始末をして、考えたことを次に生かしていく、つまり問題解決能力を身につけること、それが目標になってきます。ジュニア・ブレインはこうした公立の学校で授業として取り組みたいと考えてすでに実現している部分があると思えました。二十年かけて作り上げてきた学びの伝統を感じています。